

こども食堂 × 交流型アート

実践編

コーディネーターのためのレシピ



●本ハンドブックについて

本ハンドブックは、こども食堂での交流型アートを普及する目的で作成された「コーディネーター」向けの実践の手引です。

こども食堂でどんな交流型アートが生まれるか。いろいろなものを混ぜ合わせながら料理を作るように、それぞれ工夫してアレンジしたり、試行錯誤したりしてほしいという想いを「レシピ」という言葉に込めました。チームの中で、コーディネーターの役割を担う人たちが中心となってご活用ください。

●本ハンドブックにおける「こども食堂」の呼称に関して

本ハンドブックは、こども食堂×交流型アートの普及をめざしています。その一方で、児童館や公民館、コミュニティセンターなど、こども食堂のように多世代が交流する様々な「地域の居場所」でも行ってもらえればと願っています。よって「こども食堂などの地域の居場所」というのが正しいのですが、ここでは短く、「こども食堂」と表記します。

目次

知っておこう	背景知識	こども食堂で交流型アートが求められる背景を知りましょう。	P.3
	交流型アート参考事例	交流型アートの事例を知り、理解を深めましょう。	P.8
	プロセス理解	コーディネートの全体プロセスや、心がけたいことを確認しましょう。	P.12
やってみよう	こども食堂との関係づくり・ヒアリング	こども食堂などの実施先に交流型アートを提案し、関係性を深める際のポイントをおさえておきましょう。	P.14
	企画づくり (コンセプトメイキング)	ヒアリングをもとにして、コンセプトを仮決めしましょう。	P.16
	アーティストへの依頼・関係づくり	コンセプトにもとづき、アーティストに依頼し、関係づくりを行います。	P.19
	企画の具体化	コーディネーター・アーティスト・こども食堂の三者で、企画を具体的にしていきましょう。コンセプトが変わることもあります。	P.21
	交流型アートの実施	当日のコーディネーターの振る舞いや心得を確認しましょう。	P.24
	振り返り	企画に関わった人たちと、どんな変化が起こったかを振り返り、生まれた価値を言葉にしましょう。	P.26
おわりに 本ハンドブック作成にご協力いただいた方々 参考文献 奥付			P.27-

背景知識

ここでは、こども食堂での交流型アートが求められる背景知識をおさえましょう。ピンときた箇所を糸口に、「どういう状況をめざしたいのか」「そのためにどんなことを大事にしたいか」を考え、関係者との対話に活かしましょう。

1) こども食堂はみんなの居場所

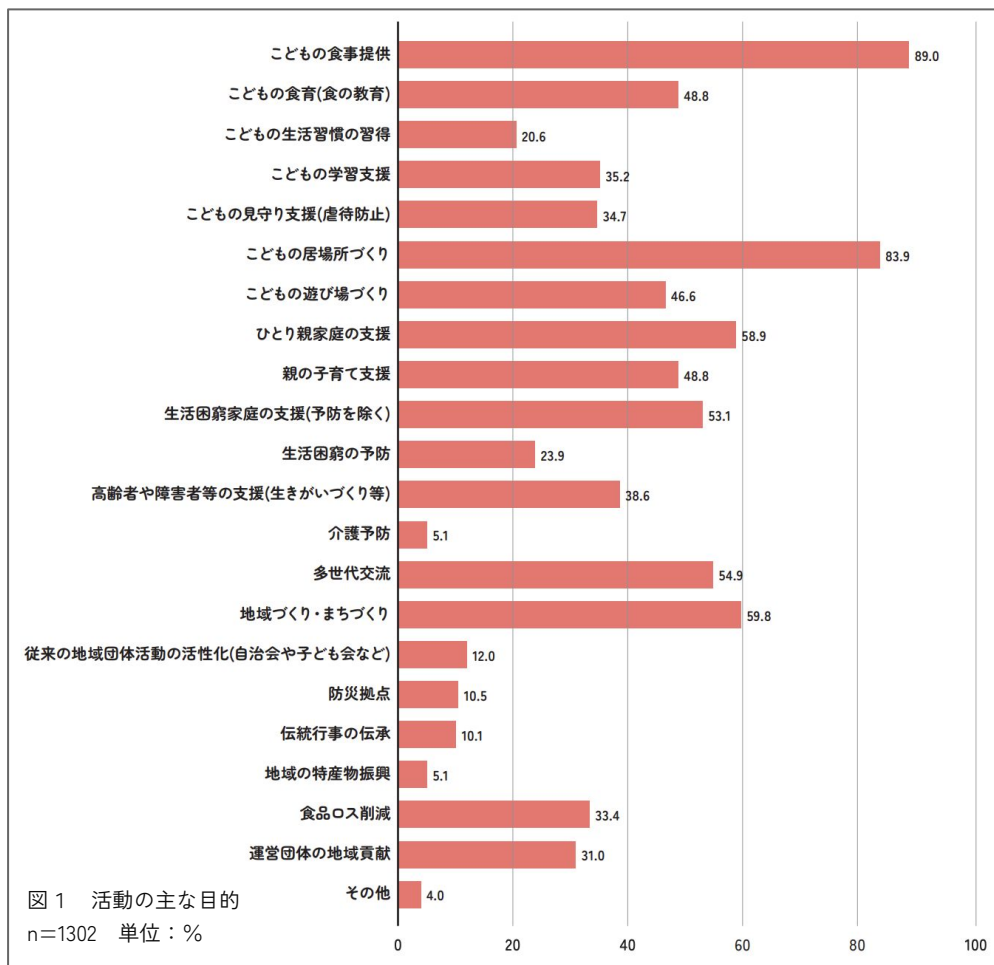
「こども食堂」とは、子どもが一人でも行ける無料または低額の食堂で、日本各地で自発的に運営されています。

その輪は全国に広がり、全国の中学校数（公立および義務教育学校の合計）を超える10,000箇所以上にまで増えました。（令和6年度）

こども食堂への調査によると、活動の主な目的として一番多かったのは「子どもの食事提供」で9割近くありましたが、続いて「子どもの居場所づくり」が約84%と高い結果となっています。また、「多世代交流」や「地域づくり・まちづくり」も、それぞれ約55%、約60%と半数以上でした（図1）。

「こども食堂」の多くは、子どもを中心に多世代の人たちが食を通じて交流する「みんなの居場所」となっています。

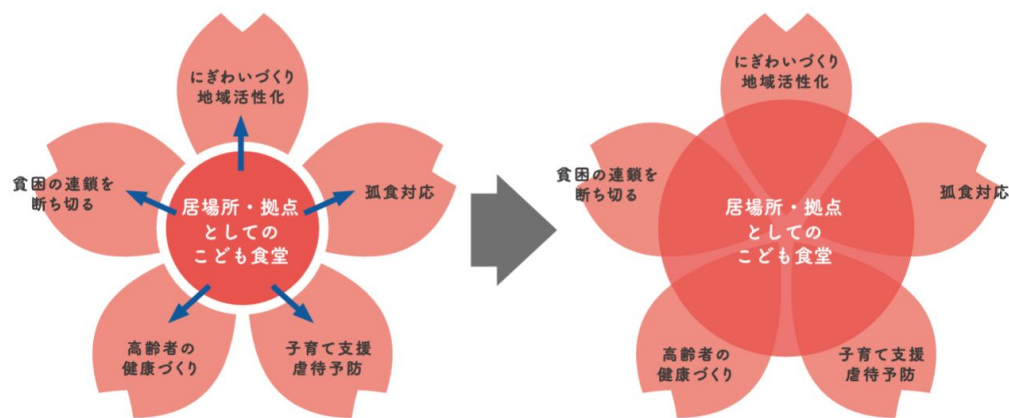
出典：認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ 第9回「こども食堂の現状&困りごとアンケート」調査結果, p.11



背景知識

2) こども食堂における「多世代交流」の重要性

こども食堂には、食事を提供するだけでなく、さまざまな価値があります。図2はこども食堂の価値を可視化する研究調査で生まれた「さくらの花びらモデル」です。安心して自分らしくいられる、来ると誰かと話せるといった《居場所・拠点としての価値》（図2花びらの中央）が大きくなることで、地域のにぎわいづくりや高齢者の生きがいづくり、孤独・孤立や貧困等の課題の予防・改善にも寄与しています。



(i) 中心は5つの花びらあるいはその変形を達成するための手段＝道具的・機能的価値

(ii) 中心には内在的・本質的価値があり、5つの花びらや類似の課題解決を可能にする要件

図2 道具的価値と内在的価値

出典：認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ
こども食堂の”価値”を「見える化」するさくらプロジェクト
報告書（2019-2022年度）, p.4

では、《居場所・拠点としての価値を高める》にはどうすればよいのでしょうか。ここでは、「多世代交流」が鍵となります。こども食堂の実践者と外部によって行われたこども食堂の価値研究会では、花びらの中心である「居場所としての価値」に着目し、多世代交流が「子育て支援」「孤食対応」といった5つの花びら（価値）や類似の課題解決を可能にする本質的な価値であるという考察を後押しする意見が多く挙がりました。この多世代交流については、わざわざ行ってこの人と話す、ではなく、たまたまこども食堂で出会った中学生と高齢者、子どもや大学生や保護者同士がおしゃべりをするといった「偶発的なつながり」が重要です。こども食堂の実践者からも、このような多様な出会いを可能にする「多世代交流の体験イベントを計画したい」という声が挙げられています（注）。

注：引用 認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ 第9回「こども食堂の現状&困りごとアンケート」調査結果, p.35

背景知識

3) 多世代交流を生む「交流型アート」の可能性

「交流型アート」とは、アーティストとそこに集う人々が即興の表現活動を共に創りあげることで、多様な交流を生み出すことをめざす活動※1です。全国各地のこども食堂で取り組みが拡がりつつあり（事例はP.8より）、こども食堂にアーティストが訪れ、子どももおとなも一緒になって表現に取り組む中で、たくさんの多世代交流が生まれることがわかりました。その交流の中で、自分の可能性を実感できたり、誰かの知らない一面を発見できたりして、居場所をもっと好きになったという気持ちを生むようです。

認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえが実施した令和5年度 内閣官房「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」※2では、交流型アート参加者の43%が地域内の知り合いが増えたと回答したほか、地域の居場所へ複数回参加経験のある参加者のうち66%が、交流型アートがあることで他の参加者との会話が増えたと答えました。また、交流型アートの参加前後で、参加者の79%が地域の居場所が好きになったと回答するなどの結果が得られました。

また、こども食堂のスタッフは、そういった多世代交流が生まれることで、子どもへの理解が深まったり、モチベーションが上がったりするといった効果も見られました。

※1 交流型アートは、本ハンドブック内での呼称（定義）です。

※2 令和5年度「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」～アートによる社会包摂を通じた「福祉を超えた」協働モデルの構築～ 最終報告書, p.11

こども食堂で交流型アートを実践された方の声

認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸 飛田敦子（ひだあつこ）さん

私たちは、居場所に集まる人たちの双方向性（交流をどう促進するか）を大切にしています。初めてこども食堂で交流型アートに取り組んだ時、支援する→される、教える→教えられるといった固定的な関係ではなく、フラットに交流できるという点で、アートはとてもしよいなと思いました。例えば、大きな白い紙にみんなで一筆ずつ絵を描いていくアイスブレイクをしたとき、そこに価値の優劣はまったくありませんでした。また、社会通念の中では問題行動とされることも、アートの中では表現になります。アートによって双方向性+価値観の転換ができることに、可能性を感じました。

背景知識

4) ワークショップのスタイルをとる理由

交流型アートの主なスタイルは、ワークショップです。ワークショップとは、「講義などの一方的な知識伝達スタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」（中野民夫『ワークショップ—新しい学びと創造の場—』岩波書店, 2001, p.11）です。その基本は、参加者の体験・共同作業にあると考えられています。

交流型アートは、アーティストが先生・見本となって正解を教えるといった一方的な関係ではなく、アーティスト・参加者が共同で行うものです。そこで起こる「共振・共鳴」とは、他者との関わりの中で（アーティストやほかの参加者の表現やありかたから）影響を受け、新たな表現や行為が生み出されることです。たとえば、アンバランスタワー（「こども食堂×交流型アートのススメ」P.6）では、ほかの参加者がやる気になった姿や、高くするための工夫を見て、自分でもこうしてみよう！という創意工夫が連鎖し、その場が盛り上がることもあるでしょう。こういった共振・共鳴の体験は、居場所の一体感や、信頼感にもつながります。後述の交流型アート参考事例（P.8）では、どんな共振・共鳴が生まれたか書いているので、参考にしてください。

また、このように共振・共鳴の体験をとまなうワークショップというスタイルが、「自己原因性感覚」および「双原因性感覚」を実感できる体験になりうることを示唆されています。（参考：苅宿俊文・佐伯胖・高木光太郎（編）『ワークショップと学び3 まなびほぐしのデザイン』東京大学出版会, 2012, p.72）

たとえば、参加者が一筆ずつ描いて大きな絵を完成させる、といったアクティビティがあったとします。他者の一筆を受け、自分の描いた一筆が絵の一部になり、自分もそこに参加している感覚を味わうことができます。こういった「自己原因性感覚」および「双原因性感覚」は、「自己有用感」（自分は役に立つという感覚）の土台となり、「自分はこの場所においていいんだ」という、受け入れられる安心感につながります。

よって、こども食堂でワークショップ形式の「交流型アート」を行うことで、多世代交流が促進され、居場所としての機能をより高める可能性が期待できます。

背景知識

まとめ

- こども食堂は、子どもを中心に多世代の人たちが食を通じて交流する「みんなの居場所」です。
- こども食堂が、子育て支援、孤独・孤立の予防といった様々な価値を発揮するためには、「居場所・拠点としての価値」を高めることが重要です。そのためにも、多世代交流がより活発になるための取り組みが大切です。
- こども食堂でワークショップ形式の「交流型アート」を行うことで、多世代交流が促進され、小さな子どもから高齢者まで、そこに集う地域の多様な方たちが「ここは自分にとっての居場所」だと実感する機会をつくることが期待できます。

MEMO

交流型アートの事例を4つ紹介します。必ずしもこども食堂で行われたものではありませんが、参考にしてください。

交流型アート参考事例1 こども食堂での演劇あそびワークショップ

ブラジルルーツの子ども/おとなが集まるこども食堂

「PROJETO CONSTRUIR KODOMOSHOKUDOU」（堺市堺区）で、シアターゲーム等を応用して「あそびの場」を開く。

主催：（公財）堺市文化振興財団

アーティスト：大熊ねこ（俳優）、はせなかりえ（俳優）、池川貴清（俳優）

関係者：（社福）堺市社会福祉協議会

事業名：令和5年度堺市文化振興財団補助事業「こども食堂における芸術家派遣事業」



●どんなコンセプトでしたか？

言葉の壁があるため、勉強に意欲があり本当はできるのに学校で「できない子」という扱いを受け続け、自尊心を失っている子が多い。親も、子どもをどう育ていけばよいのか分からないことも多い...という話をこども食堂側から聞いた。また、食堂としてもイベント等を企画してコミュニティを温めてきたが、参加者が自己表現のバリエーションを拡げ、他者の表現を受け入れるような体験、「できた」という感覚、日本人（アーティスト等）とも楽しい場を過ごせたという経験を積み重ねていきたい、というコンセプトをアーティスト・こども食堂と確認した。

●プロセスにおいてどんな気づき・工夫がありましたか？

当初は、4回かけて小さな劇を作ることを目標としていたが、2回目の終了後、改めてアーティスト・こども食堂側と話し合い、具体的なゴールに向かって練習するよりも、「共に過ごす」という体験を積み重ねていくことが大切だということになった。そこで計画を取りやめ、4回とも「一緒に遊ぶ」場にした。各回では、子どもたち自身からルールの変更があったり、学校では見せない積極性を見せる子がいたり、こども食堂側も驚く様子が見られた。そうした場が大切に4回繰り返されることで、アーティスト・参加者間に信頼関係が生まれた。一度設定した内容に固執せず、「参加者にとってどういう場がよいか」を、常にアーティスト・こども食堂側とともに考え続け、柔軟に計画を立て直す姿勢、新しいことをしているのだから、最初から何もかも決め切らない、という態度が大切だと実感した。

●どんな共振・共鳴体験が生まれましたか？

- 最初の子どもに続き、次々と自分からルールを提案する子どもがでてきた。他の子どもの表現を真似したり、付け加えたりする連鎖が起こった。アーティストが一方向的に考えるのではなく、みんなが考えてつくる遊びの場として発展・継続してきた。
- 実施後、ごはんを食べながら家庭のことをふと話してくれる子がいた。

●やってみてどうでしたか？

- 参加者にとってどういう場がよいか、関係者全員で考え、感じ、大切にできたおかげで、アーティストと参加者との信頼関係が生まれ、自由な表現の土壌ができた。
- 演劇とは言葉の芸術だと思いきや、こうもやすやすと言葉の壁を乗り越えられる技術なのだと感じた。みんなで遊びの場をつくったという体験が「自分がこの場にいることができた」という感覚に繋がったのではと感じた。

にしのこ😊まんぷく食堂（堺市堺区）で、アーティストが収集した漂着ごみや不法投棄ごみを素材として造形作品を制作するワークショップ（ゴミジナル工作©）を実施。作品を地域の病院・福祉施設・学校・公園等に展示する「芸術祭」や、作品を一か所に集めて鑑賞する「美術館」も開催した。

主催：（公財）堺市文化振興財団

アーティスト：淀川テクニク（美術家）

関係者：堺市各課部局、（社福）堺市社会福祉協議会

事業名：令和5年度堺市文化振興財団補助事業「こども食堂における芸術家派遣事業」

●どんなコンセプトでしたか？

こども食堂として日頃から、「地域や、地域のおとなと子どものつながり」を大切にすることで、「おとなと子どもが深く知り合うきっかけ」としてワークショップが有効だという前年度の実感から、引き続きコンセプトとして取り入れた。

●プロセスにおいてどんな気づき・工夫がありましたか？

●前年度はダンスのワークショップを行ったが、シャイな子どもも多く、黙々と作品に向き合う造形が向いているのでは、というこども食堂側の提案によりアーティストを選定。

●こども食堂から「地域や、地域のおとなと子どものつながり」がより深まる企画を考えたいと聞き、せっかくなら作品の素材を地域からも集め、また地域に展示できれば、子どもと地域に様々なつながりが生まれるのではという話になり、財団とこども食堂で「芸術祭」を実施することにした。

●地域内の各所で作品が展示できるよう、こども食堂が地縁団体等とも連携して病院や福祉施設、学校に働きかけ、財団は市役所の所管や関連部局に働きかけて必要な許可申請を行った。また地域内の各施設へは可能な限りこども食堂と財団と一緒に訪問し、事業の意義を説明した。また最終日の「美術館」にはできるだけ観覧に来ていただくよう働きかけた。

子どもたちが自分の作品を展示されている様子を見ることができるよう、こども食堂/子どもたち/財団とで地域を回る「芸術祭ツアー」を企画して、展示協力してくれた施設等と子どもたちとの交流を図った。



●どんな共振・共鳴体験が生まれましたか？

一人で黙々と制作する子ども、隣の子どもの影響される子、相談しあう子、共同制作する子、様々な作品作りのありかたが生まれ、自由な場が立ち上がった。

「芸術祭ツアー」において施設職員が作品について直接子どもをほめる場面があり、作品を通して地域とつながった実感を子ども自身が感じていた。

●やってみてどうでしたか？

造形ワークショップは材料準備の観点から事前の人数把握が必須であり、いつ来て帰ってもいい場であるこども食堂との相性を懸念していたが、材料の準備方法や進行手順を工夫することで対応が可能であると分かり、ワークショップに子どもを合わせるのではなく、子どもにワークショップを合わせる大切であり、可能であるということを改めて認識した。



障がいの有無、年齢、性別、全ての垣根を越えて、みんなで踊ることの楽しさや、違いの豊かさを共有する場を提供するプロジェクト。

主催：（公財）可見市文化芸術振興財団

関係者：DJ、MC、シンガー、高校ダンス部、ドラッグクイーン、地元ダンスチーム、市民ボランティア、など

事業名：みんなのディスコ

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会



●どんなコンセプトでしたか？

「全ての人々が違いを価値として受容し、ありのままの自分で幸福に共生できる社会の実現」が当財団の運営方針である。しかしながら、近隣の障がい者施設のスタッフや障がいのある人の保護者などから、障がいのある人は公共の場で文化芸術を楽しむ機会がほとんどないと伺った。そこで、障がいのある人が安心して、安全に音楽を楽しむ空間をつくりたい、そしてその空間に障がいのない人も参加することで、「違い」が「豊かさ」となって昇華し、幸福な空間が生まれると考え、コンセプトや方向性が固まった。

●プロセスにおいてどんな気づき・工夫がありましたか？

「地域のために何かしたい」と思っている市民をボランティアで公募し、その運営を組織化することで、地域住民が主体となって地域の障がいのある人を支える好循環なサイクルを生み出し、新たなコミュニティや協働関係を創出できた。●ダンスだけではなく、アートも楽しめるワークショップ等を設けることで、ダンスが苦手な方も参加しやすい環境をつくった。●簡単なダンスレクチャーや、ボランティアチームがダンスフロア内を盛り上げるなど、ダンス初心者でも楽しめる場づくりをめざした。●ショータイムによる参加者の発表の場を設けることで、参加者のモチベーションを高めると共に、自己実現の場として自尊心を高める場づくりを行った。●関連企画を実施して、会場に飾る傘を作成し、参加者へのPRだけでなく世界観を演出できた。●障害福祉の団体から、障がいのある人へのケアについてレクチャーしてもらった。

●どんな共振・共鳴体験が生まれましたか？

障がいのある人だけでなく、普段クラブに行くことのない子どもからおとなまでが参加し、この参加者の多様性が豊かさとなって様々な化学反応が起きている。その起点になっているのが、音楽を純粹に楽しみ踊る障がいのある人の姿だ。踊る楽しさを全身で発し、その楽しさが空間全体に伝播することで、踊るといふ敷居を下げ、他の参加者も自然と体が動く。みんなで踊ることの一体感が、さらに高揚感を高めている。●参加者の保護者からは「普段とは違う一面が見られた」と聞くことが多い。特にコロナ禍では自己表現の機会が限定されていたこともあり、楽しそうな表情で踊る姿は新鮮に映るようだ。●ドラッグクイーンからは、「障がいのある人と近い距離で心から楽しく踊る機会はないので、よい意味で衝撃的だった」という感想が。DJも「イベントに関わらせていただいたことに感謝している」「もっとこういうイベントができたらい」と言っている。関わってくださるアーティストや地元の方々も、イベントへの理解を深めながら、イベント自体を楽しんでいる。

●やってみてどうでしたか？

障がいのある人とない人の理解を深める場づくりとして機能し、障がいの有無を問わず、参加アーティストも含めて、「共感」の生まれる場となっている。市民による実行委員とともに音楽を通じて共感と創造につながる場をつくっていること、それを継続してきたことも重要である。理解してくれるアーティストを増やし、サポーターのやりがいを高めていくことにより、さらに新たな活動を生み出す可能性のある場、多くの人がゆるくつながっていく場となり得ると思う。

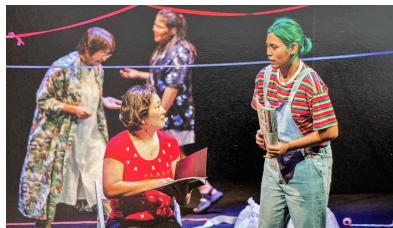
ブラジル、フィリピン、日本など異なる言葉や文化を持った出演者が集い、プロの劇作家・演出家と舞台作品を作ることで、他者との関係性を築く。

主催：（公財）可児市文化芸術振興財団

関係者：NPO法人可児市国際交流協会、多文化共生プロジェクトアドバイザー（市民）、可児市土田地区自治会連合会

事業名：多文化共生プロジェクト

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会



●どんなコンセプトでしたか？

可児市の外国籍市民人口は年々増えている。外国人居住者の子どもたちの中には日本語の壁や教育制度の違いから高校進学を断念するケースが起きている。また労働者として日本に来た人たちも、ゴミ捨てに関する問題から、不当な解雇や労働環境への不満まで様々な問題がある。外国人居住者のコミュニティだけでなく、日本人を含むもう一つのコミュニティの居場所が必要になっている。また、コロナ禍において外国人居住者への差別がある状況であり、日本人コミュニティと外国人コミュニティをつなげ、偏見や差別を生まない地域づくりの工夫が求められている。

そこで、「人」と「人」、「人」と「コミュニティ」の新しいつながりをつくるというコンセプトでプロジェクトを実施してきた。

●プロセスにおいてどんな気づき・工夫がありましたか？

●まず初めに、企画担当者が、外国籍のコミュニティに飛び込んで人のつながりをつくっていくことが大事だと気がついた。●演劇制作を進めることよりも、人間として外国籍市民をはじめ、参加者に関わることを大切にしたい。●プロジェクト参加者に、OB・OGとして次の年のアドバイザーに入ってもらおうようにした。

●どんな共振・共鳴体験が生まれましたか？

●日系ブラジル人のマツバラ ルイス マサオさん（70代）は、自動車部品工場で20年間働いたが2年前に失業して人との関わりを失い、閉じこもる日々を送っていた。プロジェクトアドバイザーのエリオさんは彼に道路の草刈りなど地域のボランティア活動への参加を促し、徐々に元気を取り戻したタイミングで、本プロジェクトに誘った。はじめは恥ずかしそうにしていたマツバラさんも、稽古を重ねるたびに他の日本人を含む参加者とも仲が良くなり、やがて居場所を見出し、ついには舞台に出演することとなった。舞台上で他の誰よりも楽しそうに演じ、終演後アフタートークに登壇したマツバラさんの笑顔が印象的だった。

●ミネーロさんというブラジル籍の知り合いがいた。ミネーロさんは10年以上可児市に住んでいたが、ずっとブラジルコミュニティから出ずに暮らしていたため、日本人の知り合いがいなかった。日本語も話せず、日本人の前では本来の陽気な性格は陰を潜めていたが、エリオさんがミネーロさんを本プロジェクトに誘い出演すると、そこに居場所を見つけ、堂々と舞台上で役を演じた。日本人の知り合いもでき、本来の陽気な自分を出せるようになった。

●やってみてどうでしたか？

プロジェクトをきっかけに、日本人と外国籍市民との新しいつながりが生まれている。また、様々な文化が交じり合う演劇作品自体の豊かさが、観客からは特に評価されており、演劇を通して普段は知ることができない在日外国籍の方々の様々な背景を物語として伝えていくことで、多様な社会の豊かさや理解を深める効果が見受けられた。

プロセス理解

こども食堂で交流型アートを実施するまでのプロセス（過程）を見ていきましょう。こども食堂だからこそ、気をつけるべきポイントはどこにあるでしょうか。俯瞰して考えてみましょう。

●コーディネーターの役割

コーディネーターとは、交流型アートにおける実施先（こども食堂等）とアーティストをつなぐ役割を担う人です。こども食堂の状況・想いをよく知り、アーティストの表現・技術を信じて、「こんな風にワークショップを実施すれば、参加する人にとって最も豊かな共振・共鳴の場となるのではないか」と構想し、周囲を巻き込み、実現に結び付けます。

いろんな視点を取り入れ、時に軌道修正しながら、関わる誰もが自分事になるような関係性づくりを心がけます。コーディネーターは、自分の意見を押し通すことはしませんが、芯を持って仕事を進めます。また、翻訳者として異なる立場にいる人々の間に立つことで、協働を成り立たせます。

●基本的なプロセスと、大事にしたいこと

交流型アートを実施するプロセスは、できあがった企画をコーディネーターが実施先に持ち込んで実現するといった「提案」スタイルではありません。それは、普段コーディネーターがアートワークショップを企画・実施するホールや公民館、体育館などと異なり、こども食堂には個々の事情があるからです。こども食堂には、「食事をする」「勉強を一緒にする」等の通常の活動があり、場所の制約（広さ、音を出してよいかなど）があります。また、こども食堂の立ち上がった経緯や、集まる人たちの特徴、課題感、ニーズは実にさまざまであり、交流型アートを実施することで期待する変化もそれぞれにちがうものです。

よって、こども食堂の通常の活動のなかに交流型アートをうまく組み込み、期待する変化を生み出すためには、コーディネーターがよかれと思った企画を持ち込むのではなく、企画づくりや準備などのプロセス自体をこども食堂側やアーティストと「共に創る」意識が重要です。

そのため、プロセスも、一方向にトントン拍子で進むのではなく、対話を重ねながら行きつ戻りつするというイメージを持っておきましょう。

プロセスの例

以下に、あるコーディネーターがこども食堂で交流型アートを実施するまでのプロセスの例を示します。ストーリーを読みながら、イメージをふくらませてみましょう。

こども食堂との関係 づくり・ヒアリング

P.14

何度か訪れたことのある◎◎こども食堂に交流型アートの話をすると、スタッフが興味を持ってくれ「ぜひ一緒にやりましょう」ということに。

企画づくり (コンセプトメイキング)

P.16

第1回打ち合わせ。こども食堂側から、「子どもたちの自己肯定感が低い」「挑戦をこわがる」という課題意識をお聞きする。コンセプトを仮に「指示されることができる／できないではなく、自ら見つけた《自分のできること》で、参加できる場をつくりたい！」としてみる。たまたま、子ども向けのダンスワークショップを行うアーティストを知っており、子どもたちが楽しめるダンスのワークショップをイメージ。

第2回打ち合わせ。コンセプトは合意。ただ、「シャイな子どもが多いので、ダンスより、黙々と取り組めるもののほうがいいかも」「ご近所に迷惑なので、あまり大きな声は出せない」とこども食堂側からフィードバックを受ける。

アーティストへの 依頼・関係づくり

P.19

市の文化施設に勤める知り合いに相談し、廃材工作アーティスト△△さんの紹介を受ける。ワークショップに参加し、これだと思い、打診。OKをもらえる。趣旨を説明し、謝礼についても相談。ぜひ一緒にやってみたいとのこと。

企画の具体化

P.21

アーティストもまじえて、こども食堂で詳細の打ち合わせ。地域全体と子どもの関わりを考えると、せっかくなら、できた作品をXX商店街に展示してはという話が出る。アーティストと準備物やりハサルの確認。こども食堂側と募集などの流れ・分担を確認。

交流型アートの実施

P.24

当日、商店街の人たちにも来てもらい、準備から手伝ってもらった。子どももおとなも、こども食堂スタッフも楽しそう。

振り返り

P.26

企画に関わった人たちとの振り返り。「作る過程で子どもそれぞれのこだわりがあり、今まで見たことのない一面が見れた（こども食堂スタッフ）」「出来上がりや作りかたのスタイルにそれぞれ個性があった。完成作だけじゃなくその途中もおもしろかった（アーティスト）」「子どもたちと関わるきっかけが持ててよかった（地域の人）」などの声が出てきた。

こども食堂との関係づくり・ヒアリング

今回は実際に取り組んでみましょう！交流型アートを実施するには、まずはこども食堂などの実施先との関係づくりが重要です。関係づくりのポイントや大切にしたいことを見ていきましょう。

●関係づくりで大事なこと

まずは実施先であるこども食堂の置かれている背景や、実践者の想いを対話によって聞き取ります。

単に楽しいだけのイベントを開くのではなく、交流型アートを行うことによって実現したいことを共に思い描くために、実施先の想いに誠実に寄り添うことが大事です。

自分たちのしたいことに協力を仰ぐのではなく、一緒に目標を立て、試行錯誤しながら交流型アートを企画・運営していきたいという姿勢でのぞみましょう。

●こども食堂との初回打ち合わせで話すことの例

- **自分たちの自己紹介、交流型アートの説明**

具体的な事例も紹介しつつ、交流型アートのおもしろさが伝えられると理想です。

- **こども食堂実践者の想いや悩みを聞き取る**

日々感じていること、どんなことを大事にしているか、来ている子どもやおとなはどんな雰囲気か...など丁寧に聞けるとよいですね。（企画づくりP.16）

- **会場候補の確認**

広さはどれくらいか、音を出してよいか、食事をするスペースのほかに使えるスペースはありそうか、レイアウト変更は可能か、近隣の公民館やホールなど、借りられる場所はあるか...などを確認できると、提案できる交流型アートの可能性が広がります。



こども食堂との関係づくり・ヒアリング

コーディネーターのココロエ

●こども食堂と「一緒に企てる」関係性をつくろう

コーディネーターは、こども食堂には課題があり、それを解決するのだという姿勢ではなく、誰もがおもしろそうと思えるものを「一緒に企てていける関係性」をつくるのが大事です。そのためには、「何をしてほしいですか」と聞くのではなく、まず一緒にやっていきたいという想いをしっかり伝えること。そして、コーディネーターの提案内容が、こども食堂の課題にフィットしており、子どもたちもおもしろいと思ってくれそう...と、こども食堂側に思ってもらえるように話をしましょう。

そのためには、交流型アートの事例を知っておき、ここでこんなことができるとおもしろそう...とコーディネーターがイメージし提案することが大事ですが、他でやることを同じようにやるのではなく、一緒に工夫しながらオリジナルの交流型アートを共創する流れがつけられるとよいですね。

●こども食堂のみなさんが大切にしていることを言葉で整理しよう

コンセプトを決めるにあたって、こども食堂のみなさんが普段から大切にしていることを聞いてみましょう。

明確な言葉で整理されていなくとも、悩みや実践の話聞く中でにじみ出てくるものを言葉にし、「こういうことですか?」と聞いてみるとお互いに確認できます。

●わかりやすい言葉で伝えよう

コーディネーター間、同業者間でしか通じない言葉や表現を使っていませんか?

こども食堂の人たちが共感しやすい言葉で伝えることを意識しましょう。

コラム

地域のリソースを把握するための工夫

地域のリソースとしてどんなものがあるかを知っておくことで、より交流型アートが豊かになっていく可能性があります。たとえば、実施するうえでの協力が得られたり、できた作品を地域のほかの場所で展示・公開するなどの広がりができたりといったことが考えられます。

そのためには、こども食堂にコーディネーターが参加、お手伝いすることで地域の方々とつながるほか、まちあるき、地域行事への参加などをするのもおすすめです。

企画づくり（コンセプトメイキング）

こども食堂のヒアリングができれば、コンセプトを立てていきましょう。企画や振り返りの軸となります。

●コンセプトとは

コンセプトとは、企画に関わるチーム全体（こども食堂・コーディネーター・アーティスト、その他協力団体）で大切にしたいことや生み出したい変化を言葉にしたものです。実施先で聞かせてもらった想いや悩みをもとに、どんなことを大事にしたいか言葉にしてみましょう。

ただし、企画を具体化していく中で、コンセプトが変わっていくこともよくあります。最初に決めたコンセプトにこだわりすぎず、こども食堂側やアーティストと対話しながら、練ったり、深めたりしましょう。

コンセプトは、企画を進める軸になるだけでなく、振り返り（P.26）でも大切になります。

[コンセプトの例]



経験が少ないため、自分に自信がない子どもが多いんだよね
...もっといきいきと挑戦できるようにならないかな。



「できた！」という感覚を積み重ねる



食堂でお弁当を渡すおとなと、それを受け取る子ども、
という間柄から一歩越えることができず、関係性が固まって
しまっている感じがします。



子どもとスタッフが、
互いに知らない一面を知る



コラム

コンセプトからイメージがふくらむ？

どんな交流型アートがよいか、コーディネートに悩むかもしれません。コンセプトからアイデアがふくらみ、どんな表現活動をするかイメージが湧きやすくなることもあります。たとえば、「こども食堂に来たことがない人がこども食堂に来るきっかけづくり」がコンセプトのひとつだったとします。「通行人に気づいてもらうために、道路に面した駐車場を使えないだろうか？」「それでは、駐車場でチョークを使ってみんなで絵かきしてみるのはいかがでしょうか？」など、アイデアをふくらませてみましょう。

企画づくり（コンセプトメイキング）

●コンセプトをつくってみよう

例をもとに、書いてみましょう。こども食堂側にも見てもらい、コンセプトを深めたり、活動内容を相談したりするとよいですね。

	例	あなたのケース
こども食堂の持つ 課題感や願い	<ul style="list-style-type: none">● 家族単位で来ることが多く、参加者同士は顔を見たことがあっても話したことはない。● 調理スタッフは子どもたちと交流する機会があまりない。● 参加を強制せず、「周りで見ている」などいろんな関わりかたができるようにしたい	<ul style="list-style-type: none">●●
コンセプト (簡潔な言葉に なっていないでもOK)	<ul style="list-style-type: none">● 子ども同士や親同士、スタッフと子どもたちの交流が生まれる場● 公園のように、いろんなアートを楽しめる場● おとなたちもリラックスして周りで見守れる	<ul style="list-style-type: none">●●
どんなアーティストを 呼ぶか、どんな表現活動 してみたいか (抽象的でもOK)	<ul style="list-style-type: none">● ライブペイント● 造形	<ul style="list-style-type: none">●●

企画づくり（コンセプトメイキング）

コーディネーターのココロエ

●コンセプトは、ヒアリングした内容を反映しよう

コンセプトを決めるときに、こども食堂のスタッフや参加者から聞き取ったこと、課題感、こうなったらいいのにといい願いなどを反映したものになっているか確認しましょう。

●コンセプトは、抽象的すぎず、具体的すぎず

コンセプトをもとに、こども食堂側やアーティストとあれこれアイデアをふくらませていきます。

具体的すぎると、こども食堂側やアーティストの発想を制限してしまうことがあります。

とはいえ、後から振り返れる程度に具体的にしておく必要があります。

事例（P.8-11）や企画づくりの表（P.17）を参考にして考えてみてください。

コラム

コンセプトと評価の関係

コンセプトは、なんのために決めるのでしょうか？まずは、企画を具体化したり、企画を進めていく段階で立ち戻って、計画を立て直したりするときにコンセプトがその軸となります。さらには、交流型アートについて関係者間で振り返るときにも、コンセプトがどのような形で実現できたかを話し合ったり、評価をしたりするとよいでしょう。

評価というと、外部から一方的に判定をくだされるようなイメージを持つ人が多いかもしれませんが、英語の"evaluation"は価値を引き出すことを意味します。すなわち、「自分たちで価値を見出す」ことが重要です。コンセプトにそって、どのような価値を生み出したのか、さまざまな人と対話してみましょう。

アーティストへの依頼・関係づくり

アーティストへの依頼や、関係を深めるうえでのポイントを学びましょう。

●アーティストに依頼・相談

実施先とのやり取りを通じて見えてきた方向性にそって、親和性の高そうなアーティストを探します。その際には、コーディネーター自身が様々な事例を通して、音楽には何ができるか、ダンスには何ができるかなどを知っておくことが大切です。（事例P.8-11）
また、アーティストの感性や表現にも寄り添い、アートやアーティストが課題解決のための道具になりきらないよう、交流型アートがアーティストにとっても意味のある表現の場になるように取り組みを設計していきます。

●アーティストに求めたいこと

- ・目的やビジョンを共有でき、よりよい場を一緒にめざすことができるか
 - ✓ ビジョンに共感をしてもらえる
 - ✓ 内容を相談したり、一緒に振り返りをしたりできる
- ・空気感を共有できるか
 - ✓ こども食堂に参加してもらったり、スタッフと対話したりすることができる

●アーティストへの謝礼について

打ち合わせやリハーサルなども含めた謝礼となっていることを確認しましょう。

アーティストへの依頼・関係づくり

コーディネーターのココロエ

●アーティストの表現にも寄り添おう

自分たちの都合をアーティストが叶える、という関係ではなく、アーティストも交流型アートと一緒に創る重要な関係者です。そのためには、まず、アーティストの表現や発信を知り、表現活動の芯（コア）にあたる場所に共感することが大事です。そして、アーティストの表現活動にとっても交流型アートの場がよいものになることをめざして対話しましょう。

●アーティストとこども食堂の架け橋になろう

こども食堂側はアーティストのことを、そしてアーティストはこども食堂のことをよく知らない状況からスタートすることがほとんどです。

コーディネーターは、アーティスト自身やその表現活動を、こども食堂側にわかりやすく共感を得やすい言葉で説明したり、アーティストにこども食堂への事前参加や訪問を働きかけたりするなど、架け橋になるように努めるとよいですね。

MEMO

企画の具体化

コンセプトがある程度固まったら、どのように実施するかを具体的に検討しましょう。実施先の場所や参加者の特徴をつかみつつ、さまざまな角度から実現可能性を探ります。

●企画の具体化

コンセプトを軸に、どんな交流型アートを行うか、子ども食堂側やアーティストと共に具体化していきます。実施する場所にアーティストとコーディネーターが訪れ、どんなことをするか、どんなことに気をつけるべきかイメージをしていくとよいでしょう。実施に必要な備品・施設の確保だけでなく、本番当日に向けての進捗管理、声掛け、ケアもコーディネーターの大切な仕事です。無理が生じていれば軌道修正し、方針変更の提案があればよりよい形を模索することを通して、全員が安心して当日を迎えられるようにします。

●三者間で確認すること

普段の子ども食堂のオペレーションをふまえて、参加者が帰って片付けをするところまでイメージし、流れや担当者を確認しましょう。次のページの表を見ながら、詳細に検討を行いましょう。

●どんな内容のワークショップをするか

アイスブレイク、空間の使いかた、食事の時間とどう分けるか（コラム「食事の時間」と「アートの時間」をわける工夫いろいろ」P.23参照）、保護者や調理スタッフなどを巻き込むか、参加したくない人はどうするか、など。

●気をつけるべきこと、配慮

「音が近所迷惑にならないか」「子どもたちの大体の年齢」「帰らないといけない時間」など。

●日時、場所、人数

リハーサルを含め、いつ、どのように行うか、食事の前に行くか後に行くか、普段の活動とは別の時間帯や場所で行うか、どんな年齢層か（募集時に年齢を制限することもあり）、など。

●広報

いつ募集して、いつ締め切るか、どの媒体で募集するか、声がけする団体は、など。

●準備物

アートに必要な道具はアーティストに準備・調達をお願いできることもあります。

企画の具体化

主に下記の項目について関係者のあいだで検討し、例を参考に書いてみましょう。

	例	あなたのケース
こども食堂の持つ課題感やニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・家族単位で来ることが多く、参加者同士は顔を見たことがあっても話したことはない。 ・調理スタッフは子どもたちと交流する機会があまりない。 ・参加を強制せず、「周りで見ている」などいろんな関わりかたができるようにしたい 	
コンセプト	公園のようなアート体験をして、子ども同士や保護者同士がふれあうきっかけをつくる	
アーティスト	○山△太さん	
どんなワークショップをするか 保護者や調理スタッフの巻き込みなども検討	<ul style="list-style-type: none"> ・アーティストとライブペイントを一緒に行う ・まわりに落ち葉をおいて、落ち葉に絵を描く 	
気をつけるべきこと・配慮	乳幼児さんも来る 子どもたちは○時には帰る	
日時・場所	<ul style="list-style-type: none"> ・○月○日13時～1時間程度 ・◎◎こども食堂 ・△△小の運動場も借りられないか？ 	
人数（世帯数）	10世帯	
広報・募集のしかた、期間	SNSとポスター ○日募集開始～○日〆切	
記録のしかた 撮影する場合は保護者の許可をいつどのように取るか、撮影NGの子どもの目印など詳細に検討	様子の撮影（写真・動画） 様子をメモ、インタビュー、事後アンケート	
準備するもの リハーサルをして追加で準備することもあります	キャンバス、絵の具、落ち葉、プロジェクションマッピング、ブロック	
協力をお願いできそうな団体	ひとり親支援協会、○○小PTA	

企画の具体化

コーディネーターのココロエ

●敬意を表しつつ、きちんとアーティストと対話しよう

アーティストのやりたい表現活動には共感し、敬意を持ちつつ、コンセプトやこども食堂側の想いと照らし合わせてフィードバックをしたり調整したりしましょう。ただし、アーティストと対話してコンセプト自体を考え直すこともあります。交流型アートに参加する人たちにとってベストになることを考え、アーティストへの敬意を忘れず、柔軟に対応しましょう。

●お互いにできていないところをフォローしあおう

交流型アートを実施するうえでは、準備段階や当日にヌケモレが発生することがあります。その理由としては、関係者の多さや、コーディネーターがこども食堂側の事情ややりかたを完全に理解することが難しいこと、初めての取り組みであること...などがあります。そこで、役割分担をキッチリして互いにミスなくやりきる、ということをめざすのではなく、何かあったときにはフォローしあったり、「これは大丈夫ですか」とマメに確認をしあったりする関係を大事にしましょう。

●今どういう状況か 不安にさせない！

こども食堂、アーティストそれぞれに、必要な確認・情報共有を適切なタイミングで行い、不安にさせないようにしましょう。

コラム

「食事の時間」と「アートの時間」をわける工夫いろいろ

こども食堂の通常の活動の中で交流型アートを行うときに、食事の時間とアートの時間をどう切り替えるか、アーティスト・こども食堂側と一緒に検討しましょう。

パーティションなどを使ったり、部屋を分けたりするほか、同じ空間であってもはじまりの音楽をかけたり、照明の色を変えたりすることで「アートの時間」がはじまります。また、アーティストが参加者に呼びかけ、当日の会場のレイアウト変更をすることもあります。そこで参加者同士が協力しあって仲良くなったり、テキパキ指示を出す子どもが活躍してくれたりして、交流のきっかけや全体が温まるアイスブレイクとしても機能するようです。

食後にアートの活動をする場合は、ごはんを食べるのを急かすことにならないように配慮も必要です。

交流型アートの実施

交流型アートの当日におけるコーディネーターとしての振る舞いをイメージしておきましょう。

●コーディネーターの役割

本番では、直接の参加者に加えて、実施を支えてくれているすべての人々がそれぞれのやりかたでワークショップに参加できる場づくりや、進行のために必要なことを自主的に判断して動く能動性が大切になります。

●コーディネーターの当日の振る舞い

- 交流型アートの前に、企画に関わる関係者でチェックイン※を行うことで、チームワークの向上やあたたかい雰囲気づくりができます。
※チェックインとは...全員の顔が見えるように座り、その日の体調や今の気分をシェアします。そのことにより、気持ちが整い、その場にいることの安心感が高まります。
- アーティストやコーディネーターと一緒に食事をするすることで、参加者と話をしたり、ちょっと気にかけておくべき参加者が見いだせたりします。
- 本番中には、コーディネーターは俯瞰的な立ち位置から、記録（写真・メモ）をとったり、気になる人への声かけを行ったり、必要に応じてアーティストやこども食堂側に情報伝達を行ったりします。

交流型アートの実施

コーディネーターのココロエ

●必要だと感じたら自主的に動こう

当日の参加者の様子、体調、気分に合わせて、その時ベストな方針を柔軟に検討しましょう。

輪に入る人と入らない人（入れない人）を、本人が望まない形で作くり出してしまうないように、参加者やスタッフが互いに声をかけあえる環境／状況をつくっておきましょう。

コラム

さまざまな参加のかたち

こども食堂での交流型アートは、関わる人もさまざまで、それだけ「関わりかた」もいろいろです。交流型アートのメインのプログラムに参加して楽しむだけが、参加のかたちではありません。

当日の準備が、こども食堂に関わる最初のきっかけを生み出すケースもあります。例えば、あるこども食堂の近所に住む大工さんは、こども食堂が開催されているのは知っており、なにか手伝えればと思っていましたが、これまで関わるきっかけがありませんでした。一方、こども食堂では交流型アートの準備において力仕事が必要になり、スタッフだけでは大変なので、その大工さんに当日の準備を手伝ってもらうことにしました。スタッフや子どもたちの喜ぶ姿を見た大工さんは、その後もたびたびこども食堂に顔を出すように。

また、アートワークショップに加わるのに気が乗らない子どもには、その子どもの得意なことで参加してもらうことができます。例えば、準備段階で片付けやレイアウト変更をお願いすると、テキパキ活躍することも。ほかにも、撮影係をお願いする、参加者の名札を作ってもらう、アーティストの補助をお願いする...など、関わりかたはたくさんあるはず。いろんな参加のかたちをつくり出し、みんなでその場をつくっていけるようにすることで、より交流型アートが豊かな居場所づくりにつながります。

振り返り

●振り返りとは

振り返りは、アーティスト、こども食堂側、コーディネーター各々の視点から見えた景色や、気づいたところを互いに共有するとても大切な時間です。参加者の普段見せない一面を実施先スタッフが知ったり、参加者の芸術的な成果をアーティストが拾い上げたりする中で、ワークショップから生まれた価値が多面的に浮かび上がってきます。

●振り返りのタイミング

振り返りは、アートワークショップ後の記憶が新しいうちに行うのがおすすめです。他方で、少し期間をあけて振り返るのがよい場合もあります。「学校や家でもこんなことをするようになった」などの参加者の変化や「子どもたちと接するときにこんな変化があった」などのスタッフの変化は、あとから出てくることがあるからです。

●振り返りのすすめかた

振り返りは、参加者がどのように変化したか、コンセプトがどのように実現できたか...といった、交流型アートによって生まれた「価値」を確認する場です。コーディネーターは、まず当初のコンセプトを振り返ります。そのうえで、どのような変化があったか、それぞれの視点で、具体的なエピソードベースで話してもらおうとよいでしょう。ただし、コンセプトや目標にはいなかったけれども、思わぬ価値が生まれていたことも積極的に評価します。

●こんなことに注意

- 表現活動の出来・不出来をジャッジしたり、自分たちの振る舞いを反省したりする場ではありません。一方で、迷ったことや疑問だったことはシェアして、次につなげるとよいですね。
- 予定時間内に全員が平等に発言できるようにしましょう。

おわりに

アートや文化芸術の話になると、「私には縁遠い」とか、「やったことがないし、センスがなくてきっとできない」とか、そうこぼす人がたくさんいます。ちゃんと分かっている人がいないと取り組めないのではないかと、尻込みする人もいるかもしれません。でも実は、アートや文化芸術こそ、「センスがある」とか「有名だ」とか「本物かどうか」とかを気にせずに、誰でも始めることができます。やったことの正解・不正解は誰からも決めつけられません。アートや文化芸術は、「その人の感じかた」を最も大切に
する営みなのです。

本ハンドブックで紹介したワークショップでは、参加する人々が、「自分は、居場所に集うみんなと一緒に、何か生み出してるかも！」と実感できることを大事にしたいと思います。

そんな体験が生まれる場づくりは、「自分たちでやってみる」ことができます。
このハンドブックがみなさんの背中を押すことを願ってやみません。

本ハンドブック作成にご協力いただいた方々（敬称略）

●プロトタイプ版を用いたこども食堂での交流型アート実証

本ハンドブックの作成にあたっては、はじめにプロトタイプ版を作成（開発）し、プロトタイプ版を用いて、下記3地域の間支援機関やアートワークショップの実績のある団体と連携し、こども食堂での交流型アートの実証とフィードバックにご協力いただきました。

宮城県仙台市

- 担当団体
 - ・NPO法人エイブル・アート・ジャパン（柴崎由美子）
- コーディネーター、連携協力
 - ・NPO法人ふうどばんく東北 AGAINあがいん（高橋尚子）
- コーディネーター
 - ・NPO法人アートワークショップすんぷちよ（及川多香子）
 - ・（一社）PLAY ART!せんだい（タムラミキ）
 - ・（一社）アーツグラウンド東北（千田優太）
- 連携協力
 - ・宮城野子ども食堂
- アーティスト
 - ・（一社）アート・インクルージョン（門脇篤）
 - ・佐々木博美 ・高橋亜希
- WS実証リサーチャー
 - ・菅野幸子

神奈川県横浜市

- 担当団体、コーディネーター
 - ・NPO法人STスポット横浜（田中真実・小川智紀）
- コーディネーター
 - ・水藤みつみ
- 連携協力
 - ・コミュニティカフェicocca
 - ・認定NPO法人びーのびーの
 - ・「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会
- アーティスト
 - ・ソメルポ（㈱せかいほことば）（もりやままなみ・さとうゆきの）
 - ・岡田智代
 - ・OUTBACKプロジェクト
- WS実証リサーチャー
 - ・久保田夢加

岐阜県可児市

- 担当団体
 - ・（公財）可児市文化芸術振興財団（松浦正和・半田将仁・澤村潤）
- コーディネーター
 - ・山田久子（まち元気リンクワーカー）
- 連携協力
 - ・植田真介（文学座）
 - ・アーラまち元気部
 - ・まち元気リンクワーカー
- アーティスト
 - ・ごちゃまぜアートの会（大野弦・坂崎紗希・斧内弥生）
 - ・演劇ワークショップリーダーメンバー（三宅恵理・大羽千春・山口文香・渡邊美奈）
- WS実証リサーチャー
 - ・南田明美

●ヒアリング協力 本ハンドブックの作成にあたり、ご意見等をお聞かせいただきました。ありがとうございました。

アサダワタル	文化活動家	中脇健児	大阪芸術大学芸術計画学科 准教授
生田創	長久手市文化の家 館長	飛田敦子	認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸 事務局長
鈴木励滋	ミコミコカンパニー サービス管理責任者	源由理子	明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科 教授

参考文献

本ハンドブック作成にあたって参考にした文献や事業報告、WEBサイトです。（URLは2025年3月時点）

文献

- 中野民夫『ワークショップ—新しい学びと創造の場—』岩波書店,2001
- 荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎（編）『ワークショップと学び3 まなびほぐしのデザイン』東京大学出版会,2012

事業報告、WEBサイト



認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ
第9回「子ども食堂の現状&困りごとアンケート2024」

https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2024/09/musubie_Qvo9B9.20b_Final_Ver..pdf



認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ
子ども食堂の”価値”を「見える化」するさくらプロジェクト報告書（2019-2022年度）

https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2023/10/musubie_sakura_web.pdf



認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ
令和5年度「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」
～アートによる社会包摂を通じた「福祉を超えた」協働モデルの構築～最終報告書

https://www.cao.go.jp/kodoku_koritsu/torikumi/modelchousa/pdf/musubie_gaiyou.pdf



（公財）堺市文化振興財団
令和5年度 子ども食堂における芸術家派遣事業 事業検証調査 完了のお知らせ【報告書PDF公開】

https://note.com/sakai_bunshin/n/n93d2509981ea

発行日 2025年3月

作成者 認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ
151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5丁目27-5 リンクスクエア新宿16F
TEL : 03-6778-8230

編 クリエイティブ・リンクワーカー推進協議会
NPO法人エイブル・アート・ジャパン 柴崎由美子
(公財) 可児市文化芸術振興財団 松浦正和・半田将仁・澤村潤
NPO法人子ども文化地域コーディネーター協会 大澤寅雄
(公財) 堺市文化振興財団 常盤成紀
NPO法人ドネルモ 山内泰・宮田智史・櫻井香那・渡邊めぐみ
認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ 湯浅誠・保坂孝信・端野真佐子・竹内ひとみ

執筆 常盤成紀・山内泰・渡邊めぐみ

編集 NPO法人ドネルモ

事例・写真提供 (公財) 可児市文化芸術振興財団
(公財) 堺市文化振興財団

デザイン 長末香織

内閣府 令和6年度孤独・孤立対策推進交付金（孤独・孤立対策担い手育成支援事業）
孤独・孤立対策に有効なアートWSを地域で自走できるツールの開発・実証・普及に関する事業
※本ハンドブックは、出典を明記する事を条件に利用（転載、共有等）を許可します